

## 令和4年度 第65回 関東高校サッカー大会県予選 大会総評

報告者：高体連技術部員 南稜高校 横山晃一

4月16日から30日にかけて令和4年度関東高校サッカー大会埼玉県予選が開催された。この大会は1月に行われた新人大会各支部予選を勝ち上がった24チーム（※<sub>1</sub>）に、昨年度の全国高校サッカー選手権大会埼玉県予選でベスト8まで勝ち残ったチーム（※<sub>2</sub>）を合わせた計30チームによるトーナメント方式で実施された。（※<sub>1</sub>昌平高校、※<sub>2</sub>西武台高校がプリンスリーグ関東への参戦のため、それぞれ不参加となっているので23+7=30チーム。）

優勝は正智深谷高校、準優勝に武南高校、3位に武蔵越生高校と成徳深谷高校という結果であった。

優勝した正智深谷は昨年度の選手権大会でシード校として3回戦から出場するも、初戦で敗退したため、今大会は北部支部予選からの勝ち上がりとなった。基本的には1-4-2-3-1のシステムを採用し、対戦相手の特徴や試合状況に応じて柔軟に戦い方を変化させる試合運びが印象的であった。準々決勝の浦和南高校戦では、相手が前線から早いプレスをかけてくると判断した時には、必ず前線の4人がワイドなポジショニングをとって相手DFとMFのライン間でボールを受けようと顔を出したり、背後を狙ってラインを押し下げる動きをしていた。相手が中盤から自陣で待ち構える態勢になると、後方から丁寧にビルドアップして左右に振りながらマークのずれを生み出そうと試みていた。この試合の得点場面も、浦和南の守備陣がボールサイドへの集結が早いことを「観て」、右MF⑨大澤が対角の左MF⑧佐藤に浮き球を通したところから生まれたものだった。

準決勝の相手となった武蔵越生は、奪ってからの素早いカウンターを狙うスタイルだったため、正智深谷はボールを大事に保持しながらピッチ全体を使って丁寧に崩そうとしていた。かたや決勝の武南戦では、ボール保持率で上回る相手に対して、守備時には1-4-4-2を形成し、ミドルサードでコンパクトな陣形を作り、奪ってからの素早いショートカウンターでゴールを奪おうと工夫していた。決勝点こそFKからのこぼれ球を押し込んでのものであったが、この試合を通して相手SBの裏にランニングをして一気にゴール前に迫っていくショートカウンターでゴールを脅かすシーンを幾度も作り出していた。

上記の通り、正智深谷は今大会を通じて様々に戦い方を変化させる特徴があったが、もう一つの特徴は固い守備が光る試合が多かったことである。武蔵越生戦では、相手が狙ってくるカウンターにゴール前まで迫られたが、1年次より出場し、主将として成長したCB④小屋を中心としたDFラインがしっかりとゴールを堅守していた。

守備に関してこの時期としては完成度が高かったものの、アタッキングサードでの攻撃には課題が残った。個人の突破に頼る部分が多かったため、フィニッシュ前のシーンでコンビネーションプレーが増えてくるとさらに盤石なチームとなりそうである。

準優勝となった武南も1-4-2-3-1を採用しているが、正智深谷と異なり、相手によって戦い方を変化させるというよりも、どの試合も攻撃的な自分たちのスタイルで戦うという印象を受けた。それは今大会に臨むメンバーのうち昨年度から主力として出場していた選手が多いため、今の時点でチームとしての完成度が高いということが理由の1つであろうか。両ボランチ⑧山田詩、⑩森田を中心にボールを保持しながら、両SB②加藤、③江川がタイミングのよい駆け上がりで攻撃に厚みをつける。左MF

⑦山田藍とトップ下の MF⑩松原は、自在にポジションを変えながら、単騎で切り込むこともできるし、コンビネーションで崩していく引き出しも持っている。決勝の正智深谷戦でも相手を押し込む時間が長く、自分たちのサッカーを貫いていた印象を受けた。

今大会の課題としては2つ挙げられそうである。1つ目は失点の仕方（時間帯）が悪いことであろう。準々決勝の大宮南高校戦では開始1分の失点。ビルドアップ時の不用意なパスをカットされてカウンターをうけて失点し、ゲームを難しくした。準決勝の成徳深谷戦においては終了間際のセットプレーからの失点によって1点差に迫られ、落ち着いて試合をクローズすることができずにバタついた印象を残してしまった。2つ目の課題はフィニッシュの精度をあげること。準々決勝では2点/18本、準決勝は2点/14本、決勝は0点/12本であった。ボール保持の時間が長く、シュートまで結びついているので、いかに最後の部分を突き詰めていくか。この部分が成長するとさらに魅力的なチームとなりそうである。

3位になった武蔵越生は昨年度同様に GK①関根を中心にした堅守からの流れるような速攻と、攻撃の活性化のための積極的な選手変更が持ち味のチームであった。今シーズンのS1リーグでもボールを保持しながら崩してくるチームには勝利を重ねているが、シンプルに力強くゴールに迫ってくるチームには苦戦する傾向にある。総体予選に向けてどう改善してくるかが楽しみなチームである。

同じく3位となった成徳深谷高校はダイレクトプレーとセットプレーが強みで、1-3-5-2の2トップがボールをおさめてゴールに直結させることが多い。2018年以來となる関東大会本戦出場を目指したが、準決勝ではその得意の空中戦で武南に跳ね返され、思うような試合運びができなかった。現時点で粗削りな分、今後ストロングポイントを徹底してくると、他チームの脅威となりそうだ。

今大会はベスト8に勝ち残ったチームのうち、7チームが県内S1リーグに所属している。年度が始まってすぐに、県内トップリーグで強度の高い試合を経験してからこの大会に臨んだアドバンテージが結果に反映されているという見方もできそうだ。

今回優勝した正智深谷が第1代表として、準優勝の武南が第2代表として5月28日から神奈川県で開催される関東大会に出場する。両チームともに県予選での成果と課題を整理して本大会に臨み、埼玉県代表として躍動してもらいたい。